
もう一人の俺

5392sisters

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一人の俺

【Nコード】

N1272T

【作者名】

5392sisters

【あらすじ】

別次元に存在するという三人の、自分、のうちの一人が存在する世界に、突然飛ばされてしまった成瀬仁18歳。でもさ、もう一人の自分が、魔王、だなんて聞いてないよ！！もう一人の俺に会っちゃったらどうなるの？！もしかして死んじゃうの？！それってドツペルゲンガーの場合だけ？！俺どうしたらいいの？！異世界で何となく頑張る少年の話。

1、聞いてないよ！

その日俺は、授業が終わってすぐに家の近くの市立図書館に向かい、閉館時間までひたすら数学の問題集を解いていた。うちの高校の図書室はかなり狭くて、図書室に近いクラスの奴らでいつも席が埋まってしまう。ちなみに俺のクラスは図書室から一番遠い。おまけにうちの担任は、ホームルームでの話が長いことで有名だった。つまりどう頑張っても席の確保は難しいと早々に悟った俺は、家から自転車ですぐぐらいのところにある、地元の市立図書館に通うことにしていた。ここが案外穴場で、閉館時間も夜9時と遅くまで開館してくれており、俺はこの勉強場所を気に入っていた。

すっかり聞きなれてしまった閉館の音楽が流れていることに気づき、俺は荷物を片づけて外に出た。生ぬるい風が頬をなでる。7月に入って夜もだいぶ暑くなってきたな、と思いながら、俺は図書館の駐輪場の方に足を向けた。学期末テストはもうすぐそこだ。中間テストでの失敗を取り戻そうと、俺は結構必死になって勉強していた。ここ数日は毎日図書館に通っている。さすがに高三のこの時期にあの点数はなかったと、俺も反省している。担任にも母親にも案の定こつてりしぼられて、相当へこんだのは記憶に新しかった。

それが起こったのは、駐輪場で自分の自転車を探しているときだった。閉館時間まで残っている人もだいぶ少なく、駐輪場に残っている自転車の数も片手で数えるほどだったが、暗闇で良く見えず、しかも自分がどこらへんに置いたかよく覚えていないということもあった、俺は端から自転車を一つ一つ確認していた。

突然視界が揺れ、ついで、鈍器で殴られたような鋭い痛みが頭に走った。俺はまっすぐ立っていることが出来ず、近くのポールに手を伸ばしたが、その手が空を切る。咄嗟のことに思わずよろける身体を支えようと、力をこめた右足の下にあるはずの地面の感触がなく、あるはずのない右手の先に硬いアスファルトの感触がある。俺

はどこにいるのだ？立っているのか？寝転がっているのか？まるで世界が反転したかのような居心地の悪い感覚。俺は完全に平衡感覚を失っていた。上が下で、下が上で、右が下で、左が右で。ぐるぐると、周囲も、自分自身でさえも、揺れていた。痛みと、脳内を誰にかき回されているような気持ち悪さに耐えられず、とうとう意識を手放しそうになっていたまさにそのとき、俺は頭の片隅で、不思議な言葉を思い出していた。

この世には、‘自分に似た人間’が3人いるっていうのは有名な話だよ。

でもね、本当はちょっと違うんだ。

この世にはね、‘自分’が3人いるんだ。

3人は皆別次元に存在していて、決して交わることはないんだよ。

3人は皆互いに魂を共有していて、

そのつながりの一つ一つが、この不安定な世の中を支えているんだよ。

交わってしまったらどうなるかって？

さて、どうなるんだろうね。

もしかしたら、この世が崩壊するかもしれないね……。

なんてね、そんなことはあり得ないから心配する必要はないんだよ。

一体誰の言葉だったのだろう。それは本当の話だったようだ。この世に、少なくとも俺がもう一人いたらしい。でもさ、そのもう一人の俺が、「魔界の王」だなんて、俺聞いてないよ？！

1、聞いてないよ！（後書き）

見切り発車第二弾。

2、風呂場からこんにちは。

「バツシャーン！」

突然身体に叩きつけられた大量の水に意識を取り戻した俺は、息を吸いこもうとして、自分が水中にいて、溺れている、状態であることに気がついた。慌てて水上に浮上して空気中に顔を出す。

「ぶはあつ、ゲホツゴホツ……」

ひとしきり咳き込んでやっと落ち着いたとき、俺は、自分が今地に足をつけていることに気付いた。

「あれ、足が着く？」

あんなにも深いと思った水深は、自分の腰より少し上ぐらいまでしかなかった。しかも浸かっている水はかなり温かい。というよりむしろ熱い。不思議に思っただけを見回してみても、俺は啞然としてしまった。

「どつ、どこだここ」

そこはまるで、‘風呂場’だった。高い天井に、豪華な装飾が施された広い湯船。金色の子供の像が持った桶から湯が注ぎ込まれている。子供のお尻から何やら不思議な尻尾が生えていて、子供の口から小さな牙が生えていて、おまけに頭から一本、角らしきものが生えていて、でも顔はすこぶる可愛い、そんな不可思議な像に思わず首をかしげてしまったが。というか、ここにはそんな不可思議な装飾がたくさんあったが、とにかくにも、おそらくここは、

風呂場' だろう。

とりあえず俺は湯船から外に出て、白いタイルの上に胡坐をかい
て座りこんだ。

「落ち着こう、とりあえず」

意味もなく一人ごとを呟いてみる。とにかく俺は、このとき相当
混乱していた。

「すう、はあ」

深呼吸を一つして、混乱する頭を鎮める。いや、鎮めたつもりに
なる。よし、まず状況を整理しよう。俺は、図書館に居た。閉館時
間になったから家に帰ろうとして、駐輪場に向かったときに突然め
まいがして、気付いたら、'ここ' でした。俺の服は、高校の制服。
あのときのままだ……びしょぬれだが。腕時計をつけていたことを
思い出し、左の手首を見る。秒針は、9時28分をさしていた。去
年の誕生日に祖母ちゃんに買ってもらった、2万もするかっちょい
い時計だ。防水加工も付いているから、多分壊れていないだろう。
今もしっかり動いている。ということは、だ。9時は、おそらく夜
の9時。図書館を出たのが夜の9時過ぎだったから、あのときから
ほとんどタイムラグがないということになる。つまり、見知らぬ誰
かにここに連れてこられた、ということは多分ないというわけだ。
図書館の近くにこんな風呂場があるような豪邸はなかったはずだ。
そんな高級住宅地に俺は住んでない。ホテルも建ってない。銭湯と
いうことも考えたが、銭湯には見えないし、そもそも近くにこんな
銭湯があるなんて、17年間地元で暮らしてきて聞いたことがない。
こんな変な装飾がある銭湯なんて。しかも、銭湯ならあるはずのた
くさんのシャワーも、大量に重ねられた洗面器や椅子も、ここには
存在していなかった。つまりここは、個人用の風呂場なのだ。

「つまり俺は、駐輪場からここにワープしてきたという……いやそんな馬鹿な、SFじゃあるまいし!」

思わず口にしてしまった非現実な言葉を、俺は慌てて自分で否定した。

「よし、とにかくここを出よう」

風呂場にこのままずっといても仕方がない。俺は、変な子供の像の傍に見えた扉の方に足を向けた。

「カラカラカラ」

横開きの扉をそつと開けて、外を覗き見る。一体どなたのお屋敷なのか知らないが、不法侵入で取っ捕まって牢屋にぶちこまれてもしたら堪ったもんじゃない。明らかに不法侵入なのは本場で、図書館で突然倒れて目が覚めたらここでした、なんて言い訳誰が信じるだろうか。キレられるか、良くて変な目で見られるのがオチだ。誰にも会わずにこのお屋敷を出て、さっさと家に帰ろう。訳のわからない状況に半ば現実逃避していた俺は、そう計算立てて風呂場の外の、恐らく脱衣スペースに誰もいないことを確認してスルリと外に出…… たつもりだった。

「ガタン」

「いてっ」

こういうところで詰めが甘いのが俺である。風呂場と脱衣スペースの間の段差に気付かず、躓いて右膝を扉に激突させてしまった。あ、ヤバイ…… と思ったときにはすでに遅し。

「何事だ？」

風呂場側とは別の扉が開き、そこから見知らぬ男が現れた。

成瀬仁18歳、絶対絶命のピンチです！

なんておちやらせる余裕は勿論そのときにはない。このときの俺は、現れた男の姿に唾然としていた。彼は明らかに、人間ではなかった。頭から生えた一本の角と口から覗く二本の牙。おまけにその威圧感のある大柄の身体の上に乗っかる顔はしかめられ、恐ろしくこわかった。ちびらなかつた俺を、みんな尊敬してほしい。

いやいやいや、待て待て待て。何なんだよ一体、どこなんだよここは？ていうか鬼？！コスプレか？！俺は、風呂場で見た変な子供の像を思い出していた。あの子供にも確か角が生えていた。おまけに尻尾も。怖い怖い、怖すぎる。捕まって拷問されるのだろうか。もしかして食われちゃう？！

死を目前にすると、脳が活性化してほんの一瞬のうちに様々なことを考えるというが、俺はまさにそんな状態だった。時間にしてはほんの一瞬だったのだろう。目の前にいる‘鬼’に対する恐怖で身体を動かせないでいると、‘鬼’の顔が突然弛んだ。まるでやれやれ、という擬態語がつきそうな顔つきで肩をすくめながら、‘鬼’が言った。

「ああ、ジン様。またですか。いつもの通りでよろしいですか？」

「……ふえ？」

予想していなかった‘鬼’の言葉に、突然すぎて変な言葉が出た。仁様って、なんで俺の名前知ってんの？ていうかいつも通りって何だ？

何が何だか分からなかったが、あまりの恐さに俺は思わず首を縦に振ってしまった。この恐怖から逃れられるなら何でもいい。

そこからの展開は、早かった。俺の肯定に、‘鬼’は一つ頷くと、すぐに部屋を出て行き、しばらくして衣服を持って戻ってきた。その服に着替えると部屋から連れ出され、外の通路をこちゃこちゃと進み、裏口らしきところから外に出された。そして、目の前に止まっていた黒塗りの馬車に乘せられ、気付いたらどこかの建物の前に居た。

「では、何か不都合があれば連絡して下さい。これ、少ないですけど。毎回のことでですけど、本当に無茶はなさらないで下さいね！」

ジャラジャラとした多分コインらしきものがたくさん入った袋を渡され、‘鬼’は去って行った。

「……どうしようか」

数分ぐらいだろうか。呆然として立ち尽くしていたあと、はつとして、‘鬼’から渡された袋を見つめながら、俺は呟いた。「またですか」「いつも通りで」「毎回のことでですけど」「いつもの服です」。俺は、‘鬼’が俺に言った言葉を思い出していた。‘鬼’は、俺がまるで知り合いであるかのように振る舞い、いつもあの風呂場から現れる、というようなことを言っていた。俺は怖くて‘鬼’の言葉にぎこちない笑みしか浮かべることができず、‘鬼’に不思議そうな顔をされたが。「いつもの服」といつて渡された服は、いつも俺が着ているような服とは様子が異なっていた。まるで昔はまっていたゲームの中の服装のようだ。中世ヨーロッパの世界をモチーフにしてデザインされたそのゲーム世界で、まるでいわゆる村人Aとかいう人たちが着ていそうな、こげ茶色の長めの胴衣に薄いベ-

ジユの厚手のズボンとブーツ、そんな全体的に地味な服装だった。ちなみに腰には、小型のナイフが申し訳程度に下げられている。ナイフなんて使えないし、もし使えたとしてもこんな小型のナイフなんて役に立つのか？という疑問はあったが、普通に渡されたので、‘鬼’が怖いからとりえあえず下げてきた。完全に装飾の一部になるだろうな。

これからどうすればいいのか逡巡していると、突然背後の建物の扉が開き、声がかけられた。

「おい、扉の前にずっと立ってられると迷惑なんだが。入るなら入る、用がないならどつかいってくれ、営業妨害だから」

明らかにダルそうな声にそう言われ、慌てて振り向いた俺の目の前にいたのは、やはり人間ではなさそうだった。ある程度予想はついていた。ここに来るまでに馬車の中から見えた外の世界の中に、人間らしき者も何人かいたが、それ以上に、明らかに人間ではない姿をした者たちがたくさんいた。今も、目の前の通りを行き交う人たちの中には、鬼らしきもの、獣人らしきもの、ゴブリンらしきものの、そんな奇妙な者たちがいた。恐怖心はまだ乗り越えられそうになかったが、彼らを見てももう驚くことはなかった。だから、目の前の彼を見ても特に驚きはなかった。

内心ではもう何となくわかっていた。ここは明らかに、日本ではない。もっというところ、地球ではないだろう。宇宙か、もしくは異次元か。そうじゃないとこんな光景、ありえないだろう？そんなSFだかファンタジーだかな展開、信じられないし信じたくはないけど、さっきからこうやって通りに立っていても、誰も俺を気にもとめなかったから、俺のような存在が別に不思議でもなんでもないんだって分かって、俺は少し安心した。それだけが救いだった。これで人間なんか下等生物だとか、食ってもよし、とかいう世界観だったら俺は多分5秒で死んでいただろう。

「この店は、宿屋ですか？」

何となくそんな気がして、目の前の気だるそうな青年に尋ねる。
薄い水色の髪にとがった耳、極めつけは皮膚に浮き出た無数の「鱗」。
魚人だろうか。

「食堂兼宿屋だな。どうすんだ、入るのか？」

「ええ、そうですね、泊ります」

青年の言葉に頷いて、俺は青年に続いて店の中に入った。とりあえず、寝る場所は確保しないとな。おそらく、今日中に家に帰るということは無理そうだから。

店の中はほどほどの広さだった。入口近くにカウンターがあつて、すぐ横に階段が続いている。奥にはテーブルが並べられており、そこが食堂を兼ねているのだろう。何人か人が座っていてご飯を食べているようだった。

「何泊だ？一泊20ギリ」だ。うちは前払いだからな」

「えーっと……とりあえず一週間で」

「了解。120ギリ」だな。名前は？」

台帳のようなものを出してきて、青年が尋ねた。

「仁です」

成瀬仁なんて言つて通じるか分からなかったので、名前だけを教えた。青年は、苗字がないことを特に不思議に思わなかったようだ。ここでは苗字がないのが普通なのかもしれない。青年は台帳に何か書つけて、それから俺を見た。何かを待っているようだった。

「ああ、お金ですよな」

あつと気づいて、俺は慌てて‘鬼’に渡された袋を取り出した。中を見てみると、やはりコインが入っていた。120ギリ―って言ったつけどお金を取り出そうとして、俺ははつと手を止めた。ギリ―って……何？お金の単位が分からないことに気付いた。とりあえず、コインをいくつかつかんでカウンターの上に置いてみる。

「ん？」

案の定、青年に不思議そうな顔をされた。

「……足りませんか？」

「足りないというか……でたらめな出し方するな」

「ええつと、ちょっとコインの使い方が分からなくて」

何か言い訳をしようとしたが、結局どうしようもなく苦笑いして答えた。知らないものは知らないのだから仕方がない。俺の言葉に、青年は変な顔をして俺をじろじろ見たあと、コインの使い方を教えてくれた。

「10ギリ―はこのコインだ。こつちが50ギリ―のコイン」

そういつて指差されたのは、金色のコインと、同じ金色のそれよりも一まわり大きいコインだった。50ギリ―のコイン2枚と10ギリ―のコイン2枚を青年に渡したあと、ついでに他のコインのことも尋ねると、めんどくさそうではあったが教えてくれた。

この世界のコインは、上から順番に50ギリ―、10ギリ―、5ギリ―、1ギリ―、10シリル、5シリル、1シリル、とあるらし

い。紙幣はないようだ。形態は、50ギリ―と10ギリ―が金色で、5ギリ―と1ギリ―が銀色、シリアルは全て銅色。それぞれコインの真ん中にほられた数字と大ききで区別されている。数字はどうやら俺には読めないようだったが、恐らく文字も読めないだろう。この宿屋の前には看板がかけられてあったが、何が書いてあるのかよく分からなかった。言葉は話せるようなのに、不思議なものだなと思う。

そう、何故か俺はこの言葉が理解できたし、話せた。明らかに日本語ではないこの世界の言葉を。それを簡単に操っている自分に気付いたときには驚いた。初めて‘鬼’に話しかけられたときは、緊張していたために気付かなかったのだが、馬車に乘せられてしばらくしたときに、‘鬼’が発している言葉が日本語ではないことに気付いてはつとした。おまけに言葉少なではあるが、受け答えしている自分の言葉も日本語ではなかった。よく分からないが、言葉が通じるのは有難かった。言葉さえ通じるならなんとかやっていけるだろう、多分。ああ家に帰りたい。

「これが鍵だ。その階段から上がって奥から2番目の部屋だな」

差し出された鍵を受け取って青年にお礼を言うと、俺は階段に足を向けた。二階に上がって、教えられた部屋に入る。そこは、ベッドと机と衣装ダンスが置いてあるだけのこじんまりとした部屋だった。広さも一人で泊るにしては丁度いい。特に変わったところはないかった。

俺は袋とナイフを机に置いて、ベッドに寝転んだ。

「ふう」

突然の急展開に、だいぶ疲れていたようだ。ずっと気を張っていたのだろう。一人になってとりあえず安心したのか、身体にどつと

疲れが出てきた。眠気が襲ってくる。時計を見ると、もう12時だった。あつちの世界なら、寝る体制に入っていてもおかしくない頃だ。ちなみにこっちの世界では、ちょうど外が暗くなり始める頃だった。だいたい夜の6時か7時ぐらいだろうか。こっちの時間の概念は知らないが。

俺はそこで考えるのを止めて、眠りに入った。明日からどうしようか、そんなことを思いながら……。

2、風呂場からこんにちは。（後書き）

一回分の投稿の量に悩みます。細切れより長い方がいいのかしら？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1272t/>

もう一人の俺

2011年10月7日23時35分発行